

第15回 堀川の流れは見えず

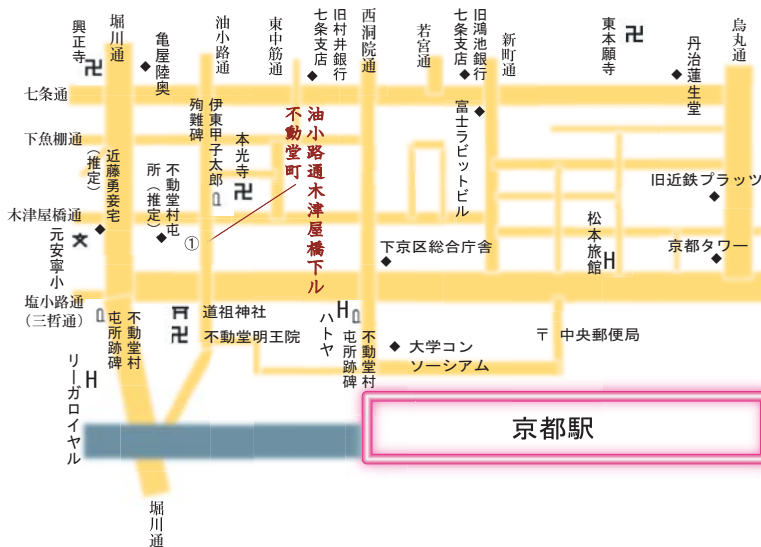
七条通—和蝋燭とレトロな「ビルヂング」

今回は、第14回の南の界限をめぐりましょう。京都駅の中央口から出ると、そこはバスターミナルとタクシーの車溜め。中央のビルには、京都タワーがそびえています。この塔も、建設時には、景観論争が起こったものですが、年月を経るとはおそろしいもの。今や、あたりの風景に溶け込んでいます。巨大な京都駅ビルの複雑怪奇な様相から比べれば、まあ、かわいい部類にはいりません。その北は、今は建設中だが、旧近鉄ブラッツの敷地。京都駅前丸物百貨店から近鉄百貨店を経た歴史はすでに遠い。このあたりは、駅前ビル街につき、目差す町名看板を見つけることは、望み薄。

烏丸通を北上し、七条警察署をすぎた交差点で左折して、七条通へ入ります。京都では唯一の和蝋燭屋、「丹治蓮生堂」(七条通烏丸西入中居町)。和蝋燭は櫛の蝋はばを使うので、西洋蝋燭に比べて煤が少ない。絵蝋燭は、花の絵柄がキレイで、京土産に最適。予約すれば、製造工程の見物ができます。

七条通の新町通〜堀川通の間には、そこにレトロな「ビルヂング」があって楽しめます。一番は、七条新町の十字路の西南かどにある「富士ラビットビル」。一九二二年築。鉄筋コン

仁丹町名看板の所在(京都駅前西側)



クリート三階建。国の登録有形文化財になっています。大きくAD1922-2002.2の表示があり、もともとの自動車販売業はすでにやめていることがわかります。現在は、一階部分は貸店舗になっていて、外食チェーン「なか卯」が入っています。もう一つは、その斜め向かい、七条通新町西入ル北側の「旧鴻池銀行七条支店」。一九二九年築。鉄筋コンクリート三階建。若林仏具製作所が、結婚式・披露宴会場として営業。さらに、東中筋七条の東北かど「旧村井銀行七条支店」。一九一四築。煉瓦造り石貼り、二階建。今は、「セカンドハウス西洞院店」でケーキとバスタ。

三哲

京都駅の駅前広場の西側には、中央郵便局があります。この北側の東西の通りは、今では塩小路通と呼ばれますが、通称は、「三哲通」。とくに、西洞院塩小路の東北かどの下京区総合庁舎（下京区役所）のあるあたりは、「三哲」と呼ばれています。本シリーズの第6回で紹介したわらべ歌にも、「ろくじょうさんてつ」とおりすぎ」とあります。このわらべ歌では、六条通と七条通の間に三哲通があることになっていますが、どう考えても、これはまちがいです。まあ、歌詞の流れというものはあるので、目くじらを立てることもありません。

『京都市の地名』では、独立した「三哲通」の項目はありませんが、ところどころに「三哲通」がでてきます。たとえば、「木津屋橋通」の項目があり、その説明の中に、

七条通（旧七条大路）と三哲通（旧八条坊門小路）の間を東西に貫通。平安京開設時に開かれた塩小路にほぼ該当。

とわずかに触られています。この記述から、三哲通は、平安京の八条坊門小路で、今の塩小路通とということになります。

なぜ、三哲通と呼ぶようになったか。京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-11『平安京左京八条二坊三町跡』(<http://www.kyoto-arc.or.jp/2006-11hombun.pdf>)には、この発掘調査地（梅逕中学校の校舎北側）の塩小路通を挟んだ向かい側にある竜岸寺（龍岸寺）（塩小路通大宮東入北側）について、

調査地から塩小路通を挟んだ北側にある浄土宗龍岸寺は元和三年（一六一八年）に僧三哲により開かれた。それまで八条坊門小路と呼ばれた通名が、三哲通とも呼ばれるようになった由縁である。

と記されています。さらに、この報告書には、この調査地の付近（三哲通大宮東入）には、明治九年（一八七六年）に仮ステンション（停車場）が設けられたこと、翌年に現在の位置に京都駅が設置されて、仮停車場が廃止されたたあと、線路は大正二年（一九一三年）まで使われていたことが記載されています。ただ、出典の引用がなく、もとの文献まで辿れないのが残念ですが。

『京都市の地名』の「醒ヶ井通」の項目に、『京都坊目誌』を引用して、次のように記しています。

北は六角に起り、蛸薬師錦小路間を中断して南は三哲

通^{踏切}以南を越え、西九条町に至る。七条以北は、天正中開通する所、其以南は慶長七年の開通に係れり。

割書の「踏切以南」は、三哲通と醒ヶ井通が交差したところの南に踏切があったことを示しています。なお、『京都坊目誌』は、明治二年（一八八六年）〜大正四年（一九一五年）の刊行。

一方、『京町鑑』に「三哲通」の項があり、次のように説明されています。

此通は梅小路也。今三哲とよぶ事は、此通大宮東入町北側に澁川三哲といひし人のやしきありし故に通の名とす。此屋敷地、今は立願寺と云寺にて、則三哲を此寺の開基とす。

此通東は油小路東入より西は大宮まで。

白露『京町鑑』、宝暦十二年（一七六二年）

『新修京都叢書第十巻 山城名跡巡行志・京町鑑』

光彩社、一九六八

文中「梅小路」は多分「塩小路」の誤り。さらに、『京町鑑』では、東西の通りを平安京の通り名に当てる場合に、今日とは一筋ずれて当てています。したがって、引用文中の「梅小路」は、正しくは「八條坊門小路」と訂正する必要があります。立願寺は、表記は異なりますが、竜岸寺（龍岸寺）のこと。現在の「梅小路」は、JRの線路の北側に沿った通りで、東は堀川通から西は大宮通まで。大宮通を渡ると、梅小路公園に至ります。

上記の引用では、三哲通（今の塩小路通）は、大宮通〜油小路間にあるとされていますが、不思議なことに、明治二年（一八八

九年）の地形図には、新町通〜西堀川通の間に、今の塩小路通に相当する道路は描かれていません。相反する情報を調和させるには、百年のうちに消えてしまったと考えるか、あるいは、あったとしても畑道の程度だったと考えることになりそうです（後述）。

ただ、「三哲」の地名は、だんだん聞くことが少なくなってきました。昭和三、四十年頃には、4番（下鴨線）や5番（銀閣寺線）の市バスが三哲を起点にしましたが、今は京都駅前です。チンチン電車の北野線（松本旅館付近が始発の京都駅前停留所）の路線を引き継いだ市バスの50番も、京都駅の次は「三哲」でしたが、今は「下京区総合庁舎前」と変わっています。ただし、下京区総合庁舎の一階部分を、市バスの三哲操車場として使っていて、ここに「三哲」の名前が残っています。

市バスの停留所名からは消えてしまいましたが、JRのバス停「三哲」が塩小路通に残っています。これは、周山行の路線のもので、京都駅から、妙心寺北門、仁和寺、高雄を経て周山まで。この路線は、毎年紅葉のころ、高雄・槇ノ尾・梅ノ尾を目差す観光客で混雑します。

新選組不動堂村屯所跡はいずこ

新選組は元治二年（一八六五年）〜慶応三年（一八六七年）の間、西本願寺を屯所としていましたが、その振る舞いに困り果てた西本願寺は、全額を負担して不動堂村に新しい屯所を用意しました。大名屋敷と見まがうような壮大な屋敷だったそうです。この屯所に、新選組は、慶応三年（一八六七年）六月からその年の

終わりまで、わずか六箇月間駐屯しました。この年は、世情あわただしく、慶応三年（一八六七年）十月には大政奉還。十二月には王政復古の大号令。王政復古により、京都守護職と京都所司代が廃止され、京都守護職配下の新選組の京都警護の役目は、その時点で終了。新選組は伏見鎮撫として、伏見奉行所に移ってしま

います。
新選組の不動堂村屯所は、明治になってすぐに取り壊されてしまい、現在の町割のどこを占めていたか、よくわかりません。西洞院塩小路の交差点の西南かど（南不動堂町）に、ホテルハトヤがあります。その玄關脇に、記念碑が建っています。新選組の



（ホテルハトヤ前）

（リーガロイアルホテル前）

新選組不動堂村屯所跡

不動堂村屯所跡といえ、もう一つ別のところに記念碑があります。堀川通を渡ったところ、堀川塩小路の変形十字路の西南かど

（たいまつどう松明町）（たいまつどう）リーガロイアルホテルの敷地内です。どちらの記念碑も「この付近」という枕が添えてあり、逃げ道を作っています。いくら広いといっても、この二つの記念碑を含む区域の全てが、屯所の敷地であったとは考えにくい。

ハトヤ前の記念碑が正しいとすると、新選組の屯所は、塩小路通より南、油小路通と西洞院通に挟まれた地域にあったことになります。しかし、この記念碑の根拠は、もう一つはつきりしません。

リーガロイアルホテルの敷地内の記念碑は、「屯所が堀川通塩小路にあった」という古老の話により、ホテルと地元の自治会が、木村幸比古氏の碑文を得て建てたものらしい。二〇〇三年の設置は、二〇〇四年に放送されたNHKの大河ドラマ『新選組！』に合わせたものですが、この碑の位置も、どうも可能性が低そうです。

この記念碑が屯所の東北端を示しているとなると、リーガロイアルホテルの敷地が屯所の敷地ということになります。このあたりは松明町で、『京都市の地名』によれば、旧「西九条村」です。もし、ここに新選組の屯所があったとすると、「西九条村屯所」というはずで、「不動堂村屯所」とあるからには、不動堂村（現在の北あるいは南不動堂町）にあったとみるのが妥当です。

一方、もしもこの記念碑が屯所の西北端付近を示しているとしたら（この場合、この記念碑を堀川通を渡ったアパホテル前に移したほうがよいことになります）、不動堂村の不動堂明王院を敷地内に含むことになります。しかし、これを壊してまで屯所を作

るとは考えにくい。さらに、不動堂明王院は江戸・明治時代から動いていない（後述するように、『都名所図会』の記載から推定できます）ので、この可能性はないといつてよいでしょう。ただし、この記念碑を、堀川塩小路の十字路（変則的）の北東かどに移せば、今の北不動堂町の西南隅になりますので、これだと、次に述べるように妥当性が出てきます。

有力と思われるのは、「不動堂村屯所が現在の北不動堂町にあった」する説です。原典を当たりながら、この説を補強して、再構成してみましよう。

子母沢寛『新撰組始末記』（中央公論社、一九六七）の「新本営」と題する文に、次のような聞書が載っています。

本願寺の本陣を、更らに堀川通りの東、（ついでに）大津屋橋の南、不動堂村に二町四方の地所を求め、ここに引移ったのは、その年の初冬であった。

「大津屋橋」は誤りで、「木津屋橋」が正しい。「その年の初冬」も、他の文献を参照すると「六月」のあやまり。多分、伏見屯所への移動時期と混同したのでしょう。この付近の堀川通は、本シリーズ第14回で引用した『都名所図会』の「西六条」の図でもうかがえるように、醒ヶ井通が代用しています。

また、同書には、「稗田利八翁思い出話」と題して、稗田翁八一歳（昭和四年十月）の聞書が載っています。稗田翁が池田七三郎と称していたころ、慶応三年（一八六七年）秋に新選組に入隊したときの様子を記しています。十一月三日、雨の中を大津へ着いて、新撰組二十名ばかりの出迎えをつけ、同道して屯所につい

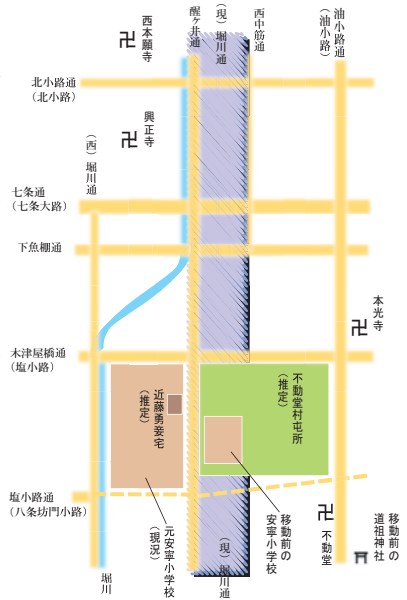
た箇所。

草鞋を脱いだのが醒ヶ井通七条下ル三丁目にあった屯営で、それは実に堂々たる大名屋敷のようでした。この時は門札は別になかったと思います。「新選組本陣」という看板がでたのは、伏見奉行所へ移ってからです。ただ言葉ではみんな「屯所、屯所」といっていました。

「七条下ル三丁目」というのは、今の木津屋町通と塩小路通（この付近で存在したとして）の間です。この勘定は、「七条通」「一丁目（下魚棚通）」「二丁目（木津屋町通）」「三丁目（塩小路通）」という具合にします。したがって、「堀川通りの東、木津屋橋の南」と「醒ヶ井通七条下ル三丁目」は、同じ区画を差している可能性が高い。つまり、西は醒ヶ井通（現在の堀川通の西側歩道）、東は油小路通、北は木津屋橋通、南は塩小路通（三哲通）で囲まれた一町ということになります。これは、現在の北不動堂町（資生堂のビルのある付近）にあたります。

「堀川通りの東、木津屋橋の南」の堀川通を、現在の西堀川通（現在は暗渠の堀川の流路に沿った通り）と考えると、元の安寧小学校（御方紺屋町）の敷地にあつたとも考えられます。しかし、『京町鑑』にすでに「御方紺屋町」の項があり、「世に御鷹小屋町と云。誤也。此南は鼠道也」とあり、現在の町名にも残っていますので、このあたりはすでに町家が立ち並んでいたことになりそうです。したがって、町家を撤去して屯所を作るということは考えにくい。ここでは、醒ヶ井通を堀川通と誤ったのではないかというようにしておきます。

新選組不動堂村屯所の所在(推定)



言葉による説明だけではわかりにくいので、推定図を示しておきます。なお、現在の堀川通が図示した位置にあると推定した根拠は、次の通りです。

- (一) 本シリーズ第14回の西六条の図(『都名所図会』)。
- (二) 本シリーズ第14回の町名看板「西中筋通正面通上ル堺町」¹³⁾(薰玉堂前)が現在の堀川通に面して存在すること。
- (三) 現在の堀川通に面している和菓子商「亀屋陸奥」(応永二八年(一四二一年)創業)が、公式所在地を「西中筋通七条上ル菱屋町」としていること(ホームページ <http://www.kameyamatus.jp/>)。
- (四) 『京町鑑』の「東堀川之分」と「西堀川之分」の記述(次回参照)。

(五) 『京町鑑』の「醒井通」の記述(次回参照)。

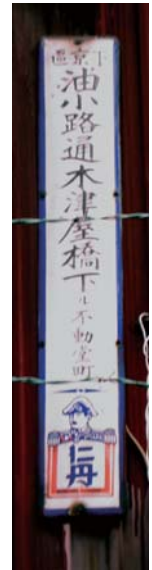
(六) 興正会館(興正寺宿坊)の公式所在地を「醒ヶ井通七条上ル華園町(通称、七条通堀川上ル)」としていること(次回参照)。

(七) 明治二二年(一八八九年)の地形図(二万分一版製地形図「伏見」大日本帝国陸地測量部)。インターネットでは、次のサイトに掲載されています。
<http://kinseijin.dyndns.org/map/odoi/odoi-shiokoji.html>

考古学的な裏づけがあればよいのですが、素人の当て推量はここまでにしておきましょう。

すでに述べたように、この豪壮な不動堂村屯所の建物は、明治初年には取り壊されています。新選組憎しといっても、腹いせに建物をすぐに取り壊すことは通常考えにくい。多分、緊急に用材が必要だったと考えるのが自然です。それにしても、取り壊したあとの用材は、いったいどこに運ばれたのでしょうか。一説に、本シリーズ第14回で述べた姫路市の亀山本徳寺の用材が、西本願寺北集会所ではなく不動堂村屯所の廃材であったということが伝えられています。

ついでに、懲りもせず、素人の当て推量を追加しておきましょう。当て推量の定石として、当時建てられた建造物がないかを探します。これにピッタリのもがあります。第14回で紹介した龍谷大学大宮校舎の完成が明治十三年(一八七九年)です。場所も、ごくごく近いです。校舎にしていた西本願寺北集会所を新選組のために追い出された西本願寺学寮が、憎つくき新選組の屯所



油小路通 木津屋橋 下ル 不動堂町 ①

を取り壊して、その用材を新しい校舎の建築に充てるなんて、想像するだに痛快ではありませんか。この当て推量は、かなり気に入っています。どなたか、実証してくれるかたはいらっしゃらないものでしょうか。

油小路塩小路の十字路から、油小路通を北上したところ、西側に町名看板「油小路通木津屋橋下ル不動堂町」①があります。この町名看板の町名「不動堂町」から、設置の時点で、まだ北不動堂町と南不動堂町に分かれていないことがわかります（南北に分かれたのは、昭和四二年（一九六六年））。

「このあたりは、駅前のビル街につき、目差す町名看板を見つけることは、望み薄」と思っていましたので、貴重な一枚。

油小路事件

町名看板①のある付近は、伊東甲子太郎（一八三五～一八六七）が、慶応三年（一八六七）十一月十八日に新選組の待ち伏せに遭遇して、落命したところです。世に「油小路事件」と呼ばれています。本光寺（油小路通木津屋橋上ル東側）前に、「伊東甲

子太郎外数名殉難跡」の碑が立っています。



伊東甲子太郎外数名殉難跡

伊東甲子太郎は、途中から近藤勇（一八三四～一八六八）らの新選組に参加し、抜擢されて参謀までのほりました。しかし、内部対立により、孝明天皇御陵衛士（高台寺党）と称する別組織を作って独立しました。攘夷の点では一致していたが、近藤勇が佐幕を勤王よりも上位におく立場を固持しようとしたのに対し、伊東甲子太郎は、より柔軟に佐幕と勤王を調和させようとする立場をとるようになっていました。とくに大政奉還の直後（慶応三年（一八六七）十月）に朝廷に呈出した建白書（四通のうち三番目のもの）は、朝廷中心の政府に幕府側も参加させようとする案を示すとともに、攘夷の立場を改めて、「開国、強国」を提唱しています。公家の政権に徳川側を加えるというのは、徳川慶喜が大政奉還という大博打に出たときに考えていた戦略とほぼ同じで

でしょう。ただ、慶喜は幕府の主導権をより多く確保しようとしていただけの違いです。この戦略も、王政復古の号令で潰れてしまいます。伊東甲子太郎は、明治維新後も生きていければ、活躍できたのではないかとおもいます。

当日、伊東甲子太郎は、近藤勇の妾宅を訪ねた帰りに闇討ちにあっています。子母沢寛『新撰組始末記』に「勇の風采」と題する島田魁の遺談が載っていますが、

「勇は、近くの七条通り醒ヶ井木津屋橋下るところの、興正寺下屋敷に妾を囲っていた。大坂の織屋の抱えで深雪太夫といったが、丈のすらりと高い、二十三四の美しい女であった

とあります。太平洋戦争のときに、この付近の醒ヶ井通が拡幅されて、現在では堀川通の続きとみなされるようになっていました。したがって、旧醒ヶ井通は、現在の堀川通の西側歩道にほぼ相当すると考えてよいでしょう。この推定が正しいとすると、近藤勇妾宅の住所（醒ヶ井通木津屋橋下ル御方紺屋町）は、元の安寧小学校（敷地建物は残っていて、梅逕中学校第二教育施設となっています）の東北隅付近にあたります。

油小路事件は、伊東が近藤勇を暗殺しようとしたことが原因だという話があります。この情報は、間諜として御陵衛士となっていた齋藤一により新選組にもたらされていますが、近藤勇妾宅を訪ねるといふ伊東の行動とは、どうも辻褄があわない。油小路事件は、十月の大政奉還と十二月の王政復古の号令の間に起こっており、大政奉還により立場を失った近藤勇が、より柔軟な対応

を主張する伊東甲子太郎を嫌って粛清したのではないかと推測されます。時局を見る目は、伊東甲子太郎のほうが、近藤勇よりもはるかに優れています。想像を逞しくすると、「このままでは新選組の隊士の中に御陵衛士の側に走るものが出てくるのではないか」と考えたのかもしれませんが。

近藤勇妾宅で、伊東甲子太郎と近藤勇の間に、どのような話が交わされたのか、その内容はわかりません。多分、伊東は、近藤勇を説得するつもりだったのですが、このこと近藤勇妾宅を訪ねた神経もはかり兼ねます。近藤勇は最初から闇討ちをするつもりで、伊東甲子太郎に酒を飲ませたのですから、こちらは極めつけの策士。近藤の妾宅を出た伊東は、木津屋通を東へ向かい、油小路との十字路の西側で、待ち伏せていた新選組隊士（大石次郎ら）の襲撃に会います。伊東の剣の腕を恐れて、槍で突いたといえますから、用意周到です。伊東が落命したのは、本光寺前。

そのあと、伊東の死体を七条油小路の交差点に放置して、御陵衛士をおびき寄せる筈にしました。翌日、死体を引き取りにきた御陵衛士と待ち伏せをしていた新選組の切り合いになり、御陵衛士側の藤堂平助ら三名が斬殺されました。この三名も加えて交差点に放置し、囮としたそうです。こうなると憎しみの連鎖になってしまいます。近藤勇は、慶応三年（一八六七年）十二月十八日に御陵衛士の残党に銃撃され負傷しています。

不動堂と道祖神社

不動堂村の由来となった「不動堂明王院」は、油小路通塩小路下ル南不動堂町にあります。献灯には、「まぼろしの屯所」とあり、側面に「誠」の字。



不動堂明王院



道祖神社

『都名所図会』には、「不動堂」の説明として、「稻荷社の南にあり。不動尊を本尊とす。不動堂此所の名とす。」とあり、「稻荷社」の項の下に記載されています。その「稻荷社」は、「油小路生酢屋橋通の南にあり。祭所 稻荷本社いなりのやしろの勧請なり。御旅所の社人田中氏おんりょ所の此所に住居す。」とあります。上の引用で、「生酢屋橋通」の表記に注意。現在は木津屋橋通。今でもそうですが、「す」の濁音と「つ」の濁音は、区別されていません。この説明だと、

稻荷社も不動堂も木津屋橋通の南にあることになりました。現在の不動堂の位置だと、八條坊門通の南（あるいは三哲通の南）というほうが正確なのですが、単に省略したのか。あるいは、八條坊門通（三哲通）はこの部分は開通していなかったとも考えられます。まったくの当て推量と置いていたのですが、明治二年（一八八九年）の地形図（二万分一複製地形図「伏見」大日本帝國陸地測量部）をみると、新町通と油小路（さらには油小路と醒ヶ井通と西堀川通）には、道路が描かれています。西堀川通から西は、町家になっており東海道本線が三哲通（今の塩小路通）に沿って（すぐ南を）走っていることがわかります。

不動堂の北隣は道祖神社。『都名所図会』の「道祖神」の説明は、「不動堂の南にあり。祭所猿田彦命まじつるさるたひののみことなり。古は五條新町の西に有り。首途神かどへのかみと称す。」となっています。この説明では、不動堂と道祖神社の位置が現状とはいれかわっていますが、どうなっているのでしょうか。『京都市の地名』では、「不動堂町」の項に道祖神社について、『京都坊目誌』を引用して、「それまでの所在地、油小路東側（ちょうど不動堂の東南方向）が明治六年（一八七三年）に鉄道用地になったため、西側（おそらく現在の位置）に移った」としています。

『都名所図会』では、さらに「書聖天満宮」の項があり、「道祖神の社内にあり。烏石葛辰碑うせきかつしんひの銘を建る。篆字は岡白駒の筆なり。」とあります。現在は、道祖神社の末社として幸神社、稻荷社、書聖天満宮。末社の稻荷社が『都名所図会』所載のものかもしれません。

大学コンソーシアム京都

中央郵便局の西側に「大学コンソーシアム京都」(西洞院塩小路下ル)があります。京都の大学、地域社会および産業界との協力による大学教育改善のための調査研究、情報発信交流、社会人教育に関する企画調整事業などをおこなうために、一九九八年に設立された財団法人。大学生には、単位互換制度(加盟大学・短期大学の学生が加盟の他大学の単位を取得できる制度)やインターンシップ(就業体験制度)、課外学習講座(語学講座、資格取得・検定講座)など、社会人のためには、生涯教育(京カレッジ・プラザカレッジ)などが用意されています。



プロフィール

藤田眞作(ふじたしんさく)。一九四四年(昭和十九年)北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム(株)足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所(<http://xyntex.com>)を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」(第15回) 2008/09/30

2009/01/11 公開用

© 2007, 2008, 2009 藤田眞作 <http://xyntex.com>